瀬田の丘 裏庭版

主任司祭から瀬田の兄弟姉妹へ

主任司祭 小西広志 神父

創刊 2022年
編集協力・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部　東京都世田谷区瀬田 4-16-1

平和についての三つの話

三つの話を用意しました。皆さんの平和についての願いが深まればと思っています。

1.「戦争ってあんなもんじゃない」

今からちょうど二十年前の夏のことです。わたしはドイツ語のクラスに参加するためにオーストリアの南、通称、南チロル地方にある古い修道院にいました。そこには、フランシスコ会の兄弟たち、教区司祭、そしてボスニア・ヘルツェゴビナのフランシスコ会の神学生たちが集まっていました。皆でおよそ二ヶ月間にわたってドイツ語の勉強をしたのです。

教区司祭の中には若いアメリカ人の司祭もいました。ちょうど二〇二二年の、いわゆる９１１事件の一年後でしたから、彼は少し緊張していました。初めて自分の国で大きなテロ事件、しかも悲惨な事件が起こったからです。そんな彼を、ボスニア・ヘルツェゴビナの神学生たちは冷ややかに眺めていました。彼らは子どもの頃、多感な頃に、戦争で国土がめちゃくちゃにされたからです。彼らは自分たちの国をダメにしたのはアメリカだと信じていました。確かにあの時、NATO軍による空爆がありました。その背後には超大国アメリカの思惑があったからです。

神学生たちは何かとアメリカ人の司祭をバカにしていました。一人の若い司祭と十数名の若い神学生では、司祭の立場は弱いでしょう。この愛国者の司祭は、共同体の中で次第に孤立していきました。彼の緊張が頂点に達したとき、彼は皆の前でこう叫んだのです。「今、ぼくたちの国は戦争状態だ!!」

神学生たちは顔を伏せて黙ってしまいました。そんなやりとりを眺めていたペルー出身の兄弟が小さくつぶやいたのです。「戦争ってあんなもんじゃない」。

この言葉は、今もこころに残っています。ペルー出身の彼は小さい頃から戦いの中で生きてきました。軍事政権による悲惨な政権転覆を目の当たりにしてきました。彼の体験した戦争は、人間が失われていく、人間がモノのように扱われていくものだったのです。

わたしの仲良しのアフリカ人の兄弟もそのクラスには参加していました。モザンビーク出身の彼は、まさに生まれたときから今日に至るまで戦争の中で生きてきたのです。彼はそのアメリカ人の司祭の振る舞いをじっと眺めていました。そして沈黙を守ってきました。「俺たちは生まれたときから戦争を生きてきたんだ」とそっと

打ち明けてくれた彼の表情は忘れられません。

恐らく、その若いアメリカ人の司祭には、この二人の兄弟たちの思いは伝わらなかったでしょう。彼は自分こそが被害者だと思いこんでいたからです。しかし、目の前に真の被害者だった神学生たちがいました。そのことは分からなかったのだと思います。そして、神学生たちは、アメリカ人の司祭を憎んでいました。国土を蹂躙したのはアメリカだと教わっていたからです。平和を望みながらも彼らは決して理解し合えないのです。

ペルー出身の兄弟も、モザンビーク出身の兄弟も苦しんでいたのだと思います。本当の平和をどのように築いていったらよいかが分からずに。タリバンに対しての怒りはありながらも、一方で「ざまあみろ」というアメリカに対する気持ちがあったのでしょう。右に左にゆれ動くこころの動きに苦しんでいたのだと思います。

2. よかったね

そんな二十年前の体験ですが、参加していたドイツ語のコースの期間中に、たまたま、その町出身の新司祭の初ミサを一緒に祝う名誉にめぐり会いました。十数人の司祭たちと、町の人々が新司祭の出発をお祝いしたのです。ミサの前に一人のアフリカ出身の教区司祭が、まるで我が事のように喜んでいました。「よかった。よかった。お父さんもお母さんもうれしいだろうね」と噛みしめるように繰り返す彼を見て、わたしは不思議に思ったものです。「なぜこの人はこんなに喜んでいるんだろう」。その日の午後、アフリカ出身の兄弟と修道院の中庭を散歩しながら、この疑問を投げかけてみました。そうしたら、こんな答えが返ってきたのです。「彼は、両親を虐殺で失っているんだ。自分の叙階式に両親はいなかったんだよ」。我が事のように喜んでいた司祭は、自分の哀しみの歴史を神の「救いの歴史」にささげたのです。

平和を生きようとする人とはこんな人なのかもしれません。どんな時にも神の祝福を見つけ出す人です。祝福などないと思われるような悲惨で、惨めな場所にあっても、祝福を与えようと努める人です。

3. 強制収容所

そんな濃厚な体験をさせてもらったオーストリアの片田舎での夏の日々でしたが、大きな発見もありました。それは、ポーランドの兄弟たちが聖マキシミリアノ・マリア・コルベに対してあまり好意的には見ていないという事実でした。二人のポーランド人の司祭の兄弟がわたしたちのグループにいたのですが、彼らはいつも一緒に行動していました。ドイツ語を学ぶことにあまり積極的ではなかったようにも思います。しかし、わたしもそうでしたけれど、ドイツ語やフランス語を学んだという証明書がなければ学位が取れないので、仕方なしにクラスにいるような感じでした。

毎週末にはコースの参加者で遠足よろしく、各地を訪れました。イタリアとの国境にあるドロミテ山脈の雄大な姿に感動したり、ボーゼンという国境の町で聖クララのお祝い日を祝ったり、ザルツブルクの町を訪問したりとけっこう楽しい時間を過ごしました。

ある町の小さな教会に、コルベ神父さまのことについてのポスターが貼ってありました。「ポーランドの聖人だよね」と彼らに語りかけると、「こんな人はたくさんいたんだ」と吐いて捨てるように言いました。わたしは、戦争中にたくさんの司祭や修道者が強制収容所で殺されたことをその時初めて知りました。いえそれどころか、自ら進んで強制収容所へと向かう兄弟たちがいた事実も教えられました。「わたしたちはこの人たちと一緒にいます」と語りながら。

鉄条網の向こう側に、修道服を着たまま立ちつくしている名も無

い修道士たちの写真がたくさん残されています。強制収容所にはユダヤ人だけがいたわけではありません。ポーランド、ウクライナ、ベラルーシでは知識階級の人々（議員、教師、医師など）も収容されました。また、多くの聖職者と修道者も収容されたのです。恐らく彼らは殺されていったでしょう。

「わたしはこの人たちと一緒にいます」という言葉は、聖フランシスコのこころを表すものです。

声高に平和を叫ぶのは間違いではありません。平和は勝ち取るものかもしれません。しかし、平和のないところに神の祝福を求める。そして、平和がないと思われるような場所へとでかけて、「この人たちと一緒にいます」と自分のいのちを差し出す。そんな生き方が、本当の平和を作りあげていくのだと信じています。

絵画に寄せて

アッシジの町のはずれに聖フランシスコ大聖堂があります。一二二六年十月三日の夜にアシジ近郊のポルチウンクラで帰天したフランシスコの遺体は聖ジョルジョ教会（現在の聖キアラ大聖堂）に安置されますが、一二三〇年にこの聖フランシスコ大聖堂に埋葬されました。この大聖堂は上下の二層の聖堂から成り立っています。下の聖堂はロマネスク様式でフランシスコの墓所の聖堂です。主祭壇の下に聖フランシスコの墓があります。上の聖堂はゴシック様式です。ここはフランシスコ会のための聖堂でした。修道会の公式の行事や儀式で使われたのです。

「サン・ダミアノでの祈り」

聖フランシスコ大聖堂にはたくさんの美しい絵画があります。チマブーエ、ジョット、マルティーニなどの手によるフレスコ画にあふれています。上の聖堂には一二九七年から九九年にかけて作成された二八枚の一連の作品群があります。これを「ジョットによる聖フランシスコの生涯」と呼びます。しかし、中世最大の画家ジョットによるものではなく、ジョットの工房にいた無名の画家たちによって描かれました。

この作品群を祭壇と相対する位置から眺めてみると、全体で聖フランシスコの生涯と彼にまつわる奇跡が分かるようになっています。祭壇に向かって右側奥から順番に聖人の生涯が描かれていきます。三つないし四つの場面が一つのセットになりながら聖堂の入口へ向かって展開して行きます。入口を挟んで両側にも絵画はあって、さらに聖堂の左の壁を祭壇に向かって進んでいきます。

「ジョットによる聖フランシスコの生涯」は聖フランシスコの生涯を伝えるものですが、作者はフランシスコがキリストに似たもの、すなわち「もう一人のキリスト」（Alter Christus）の視点から描いています。ですので、聖人が受けた聖痕がこの一連のフレスコ画の中心点となります。

第四番目のフレスコ画は「サン・ダミアノでの祈り」と題されています。現在では消えかかっていますが、絵の下にラテン語で次のように記されています。

「フランチェスコが十字架像の前で祈りをささげていると、『フランチェスコよ、わたしの家は廃墟になろうとしている。行って立て直せ』との声を聞いた。この『わ

たしの家』とはローマ教会のことである。」

若き日のフランシスコはサン・ダミアノ教会にかかげてあった十字架の前で祈りました。著作には次のようにあります。

十字架につけられた主のみ前での祈り

おお、高く、そして栄光に輝く神よ、
わたしの心の闇を照らしてください、
そして、わたしにお与えください、
真っ直ぐな信仰と、
確かな希望と完全な愛、
［そして］分別と認識を、主よ、
わたしがあなたの聖なる真実の掟を守りますように。
アーメン。

この祈りは、聖人が実際に祈ったものだと思われます。彼は、生涯を通じて十字架を見つめ、十字架の主と一つになりたいと願っていたのです。

主任司祭から瀬田の皆さまへ

コロナ禍が一段落して、日常の生活に戻りつつあります。人と人とが出会って、交わるのがこんなに楽しいことかと改めて実感しております。

瀬田教会も９時半のミサでは新しいミサ曲を歌うようになりました。皆でミサに集い、一緒に歌い、ご聖体をともに分かちあうのは、教会の本当の姿のように思います。

今一度、主日のミサの時間割などをお伝えします。

午前７時のミサは「修道院のミサ」となります。もちろん、信徒の方が参加できないわけではありませんが、「修道院のミサ」にあずからせていただいているとご理解ください。

８時半と９時半のミサは瀬田教会の「小教区共同体のミサ」となります。コロナ禍でミサの回数を増やしましたが、今後もこの時間割でおこないます。

もし、９時半のミサだけにしてしまうと、聖堂に人が入りきれないと思います。おかげさまで瀬田教会はこの４年でずいぶんと信徒の方が増えました。新しく洗礼を受けた方、他の小教区共同体から移ってこられた方など、多くの方々が集えるようになりました。

主任司祭としての現在の悩みは、二つのミサのおかげで小教区共同体での人の交わりが希薄になったかな？ という点です。どのようにして「一つの」教会となれるのでしょうか？ 皆さんのお力をお借りしたいと思います。

春に「マリア祭」として野外ミサをしました。秋もしましょうという声がありましたので、**「ロザリオ祭」**として合同のミサをおこないたいと思います。次のようなスケジュールです。

日時：10月29日（日）　午前10時半より（この日は８時半と９時半のミサはありません）

場所：アントニオ会館の庭

ミサの後に軽食を用意しますので、楽しくお過ごしください。

いろいろな人との出会いと交わりがあっての教会です。皆さんのご協力をお願いします。